# 現代文 表現の解説

**なぜ、「花弁」を見て、山椒魚は「今にも目がくらみそう」になったのか。（P119 L5-9）**

→花弁がぐるぐる回っているのを見て目が回りそうになったから。また、渦から逃れられずに消えてしまった花弁を見て、閉じ込められて動けない自分の死すべき運命を感じたから。

この表現が「（小魚は）なんという不自由千万なやつらであろう！」の直後にあることに注目すること。山椒魚は自分のことを差し置いて小魚を嘲笑したが、その直後に花弁を見て、小魚以上に不自由で絶望的な自分の運命をふと感じ、辛くなったのである。（担当：吉岡）

**「えびが笑う」(P120 L15-16)とはどういう表現か。**

→えびが身体を曲げ伸ばして泳ぐ様子は、人間がお腹を抱えて笑う様子に重ね合わせたもの。

　えびが本当に笑っているところなんて見たことがありませんよね。とても独特な表現だと思います。ここはどんな場面だったかというと、小さいながらもできることを一所懸命にやっている小えびに比べ、自分はいつまでも「くったくしたり物思いにふけったりするやつ」だったことに山椒魚自身が気づき、どうしても岩屋から出なければと奮闘するシーンでした。それも失敗に終わったのですが、えびは山椒魚のその唐突な動きを見て笑ってしまったわけです。

実際にえびが身体を曲げ伸ばして泳ぐ様子は、人間がお腹を抱えて笑う様子に重ね合わせることができます。こういった理由からも、「えび」がキャスティングされたのかもしれませんね。（担当：濱部）

**「ブリキの切りくず」(P122 L7)とはどういうことか。**

→「全く役に立たない」ということ。

　ブリキとは、スズをメッキした鋼板で、昔はよく玩具や缶詰に使用されていたそうです。しかし、どう考えてもここでは文脈的に「ブリキ」が示している意味が違うようですね。活発に動く蛙を見た山椒魚が、身動きすらろくに取れない、不甲斐ない自分を例えて表しています。こういった状況での「ブリキ」は「役に立たない、不必要なもの・邪魔なもの」の例えとして使われます。これは余談ですが、アメリカの児童文学作品『オズの魔法使い』(1900年)にも、何に対しても勇気が出せず誰の役にも立てないことに悩むキャラクターとして「ブリキの木こり」という人物が出てきます。（担当：濱部）

**「諸君は、発狂した山椒魚を見たことはないであろうが、この山椒魚にいくらかその傾向がなかったとは誰が言えよう。」（P121 L7-8）や、「どうか諸君に再びお願いがある。」（P123 L1）といった呼びかけの手法を、作者はなんのために用いたのか。**

→山椒魚の悲嘆を強調するため。また、読者が山椒魚に共感しやすくするため。

それまではずっと『山椒魚』の物語の内部で話をしていたのに、ここで途端に語り手が現実世界へと飛び出し、読者に話しかけてくる。ここで読者はふっと山椒魚の状況を別の視点から見つめ、想像を膨らませることができる。一歩間違えば単に読者を集中から逸らすだけになる大胆な手法だが、井伏鱒二はこれを物語の中に溶け込ませることに見事に成功している。（担当：吉岡）

**「鉱物」とは何を指しているか。**

→生命活動が生存ぎりぎりの状態のこと。

P124、L13における「岩屋の囚人たち」は山椒魚と蛙を指している。両者とも冬期には冬眠をする生き物なので、その生存ぎりぎりの動かない状態を鉱物、春になり冬眠から覚めて、活動を再開した状態を「生物」と表現している。「鉱物」は思考や感情の変化もない状態である。それが「生物」となり、再び、生命活動を再開し、思考と感情の対立である自己の主張を始めたということである。ここでは、時間の経過と、解決へのプロセスを経るための変化を示している。（担当：亀井）

**「去年と同じくしきりに杉苔の花粉の散る光景」が、なぜ蛙の「嘆息を教唆した」（P125 L9-10）のか。**

→花粉の散るものがなしい光景と、それが示唆するまた一年も経ったという事実に、閉じ込められた蛙はつらくなったから。

普通なら「花びらが散る」とでも言うところだが、花びらはないので花粉。一つには、桜と一緒で散っていく様子がものがなしい。もう一つには、花粉が舞うということはまた一年経ったのだということなのが蛙にはものがなしい。なお、岩屋の中では花粉以外に季節を示すものがほとんどないことに留意。（担当：吉岡）

**小動物を登場させた意図とは何か。**

→主人公といえる山椒魚と対比される「小えび」や「蛙」を出すことで、人間の弱い部分や不安や屈折した心理を読者にとらえさせるため。

この小説の主人公といえる山椒魚は当時の知識人だと考えられている。知識人が肥大化した自分の頭ゆえその範疇から逃れられずに、外界から隔絶され、閉じ込められる。そして自分を取り巻く小動物のたちとのやり取りの中で、孤独と絶望を募らせていく。それは寓話的な構成になっているとも言える。時代を超えて、普遍的な感情や心理といったものを、小動物とのコミュニケーションを通して、寓話という手法で純粋に表現していることに着目してほしい。（SNS⇔直接的会話、オンラインとオフラインの差）（担当：亀井）